



旧朝鮮総督府庁舎：ソウル市（6号・2013年）



弥勒寺址石塔と礎石：全羅北道益山市（8号・2015年）

ように、と考えている」と言ったことがあった。おそらく新宿あたりの酒場での取りとめなく話が広がっていった時のことだろう。どんな流れでの話であったのかも覚えていないのだが、陶芸家の佐渡の義父が日頃口にしていたこととどこか似ていたので、話が盛りあがったのを記憶している。

1950年代の抽象・非具象表現の流れをうけて厚塗りや粘着性のつよい油絵を描いていた川添さんだったが、そのころ墨絵風の風景描写や書にも関心を広げていた。画に滋味のある短文を加えるというスタイルを見つけたのは多分この時期だろう。絵と一体になるよう配された文字は、川添さんが聴きとった往時の工人のつぶやきだったのかもしれない。川添さんのこうした絵に向きあうていねいな姿勢から、私は多くのことを教わっていた。

現代人間学部がこの企画を立案されたことを嬉しく思っている。川添さんの絵の広がり方をあらためて認識させられたからである。

【ひいらぎ みつひろ・元表現学部教授】

工人たちの声を描く

終 光緒

川添さんがまだ50代の頃だったと思う。「旧い家屋の柱や土器のかげらなどを触っていると、そのていねいな仕事ぶりや確かな手わざの跡に目を見張ってしまうことがある。これらをなぞるように描いていると、絵筆の先から造った人たちの声がかすかに聴え、立ち働く姿や仕草が目に見えてくるような気がする。工人たちが交わしているそんな言葉を描ける